

全国町村会

吉田会長が
「地方創生に関する地方六団体との
意見交換会」に出席

▲ 発言する伊東大臣

会議では、はじめに伊東地方創生担当大臣が挨拶に立ち、「先日、地方創生2・0基本構想が閣議決定された。地方創生1・0の反省を踏まえ、少子化対策に取り組みつつも、人口減少が続くことを真正面から受け止め、適応策を講じていく。本構想には、皆さまでいただいた意見も参考に、スマート農業の推進やふるさと住民登録制度の創設等を盛り込んだ。基本構想で示した方針を踏まえ、地方創生2・0の取組に早急に取りかかるとともに、年内には総合戦略を策

吉田隆行会長（広島県坂町長）をはじめとする地方六団体代表は6月24日、「地方創生に関する地方六団体との意見交換会」に出席し、伊東良孝地方創生担当、新しい地方経済・生活環境創生担当大臣と「地方創生2・0基本構想」について意見交換を行った。



▲ 発言する吉田会長

定するので、自治体の皆さまには地方版総合戦略の検証や見直しの議論を進めていただくようお願い申し上げます」と述べた。

続いて、地方六団体を代表し、村井嘉浩全国知事会長（宮城県知事）から、「地方創生2・0基本構想においては、強く豊かで新しい楽しい地方の実現に向けた前向きな政策が掲げられた。我々地方自治体も国と力を合わせ、地方創生の実現に向けて全力で取り組んでまいる所存である。本日の意見を踏まえ、総合戦略を、

活 動

地域の実情に即した施策としていた
だきたい」と述べた。

その後意見交換に入り、吉田会長か
らは「都市から地方への人の流れを作
り、東京一極集中を解消するための大

新任都道府県町村会長の略歴

静岡県町村会は今和7年6月16日
の総会で次の通り会長を選出した。

（6月18日就任）

静岡県町村会長
賀茂郡西伊豆町長

星野 浄晋
昭和53年2月4日生



【町村長としての当選回数】3回

【町村長に就任するまでの経歴】▽
平成16年～旧西伊豆町議会議員▽平
成17年～西伊豆町議会議員▽平成29
年～西伊豆町長

【町村会関係の経歴】

▽令和3～5年静岡県町村会監事▽
令和5～7年同副会長

胆かつ強力な対策を推進するととも
に、人口減少を食い止めて持続可能な
社会を創るために、国にしかできない
取組を進めること」と支援を求めたほ
か、「地方経済を大きくするためには、

【主な業績】

▽地域商社事業▽健康づくり「近
所型介護予防」事業▽サテライトオ
フィス利用促進事業▽産地直売所
（はんばた市場）整備▽ツツテ西伊
豆事業導入▽健康づくり給付金事業
▽地籍調査事業推進▽防災力向上事
業津波避難行動ルールブック製作▽
津波避難タワー整備▽トイレレレ
ラー整備▽黄金崎公園整備事業▽高
校生通学費助成事業▽SS過疎地对
策策定▽ロケさば西伊豆設置▽西伊
豆海と森の6次産業化プロジェクト
事業▽サンセットコイソ事業導入▽
認知動作型トレーニングマシン導入
▽静岡水わさび地産地消推進事業▽
漁港利用促進システム「海釣りGO」
導入▽学校給食無償化実施▽学校特
別教室エアコン設置▽津波避難誘導
看板等整備▽ワーケーション施設整
備事業▽体育館等管理用リモートロ
ック導入▽出産成長祝い金支給制
度導入▽スポーツ合宿誘致事業▽給
水車整備

【趣味】子育て・野球・料理

【家族】妻・長女・長男・母

中小企業支援や新規の起業促進、関係
人口の拡大や多様な人材が地域で生
活・活躍できる環境整備が必要」とし
たうえで、都市と地方で人や企業、モ
ノ、カネが循環する仕組みづくりの後
押しをするよう訴えた。

また、地方版総合戦略の策定につ
いては、「実効性のある内容となるよ
う地方においてしっかりと考えること
が必要」と述べ、最後に、地方主体
の取組を支える予算の持続的確保等、
推進体制の強化を求め、発言を締め
くくった。

地方六団体からの発言を受けて、伊
東大臣からは「東京圏への進出抑制や、
地方での基盤づくりについて、国とし
ても企業や役所へ強力に働きかけた
い」との発言があり、閉会した。

◎ 町村週報ご購読のご案内 ◎

「町村週報」を毎号ご自宅や職場
にお届けいたします。ご購読を希
望される方は、はがき、FAXま
たはEメール（kouhou@zck.or.jp）
にて、全国町村会広報部までお申
し込み下さい。

★年間購読料1,500円（送料
込み）

★請求書を送付いたしますので、
折り返しお振り込み下さい。



▲出席した地方六団体代表（右から2番目が吉田会長）

特 集 未来へつなぐ森林整備等の取組



▲立原高原に咲き誇るレンゲツツジ

1. 南相木村の概要

南相木村は長野県の東南端、群馬県境に位置しており、東西20km、南北5kmの細長い地形で、千曲川の支流、南相木川が谷間を縫うように東から北西

ポイント

- ・村内のカラマツから種を採取・育苗・植樹する循環型林業をめざしている
- ・村内の新規生産者によるカラマツ育苗に対して支援
- ・天候・地温等を記録し、どのような状況で発芽しやすいか・成長に適しているのかをデータとして記録・分析、今後の林業分野へ活用

村の自然を守り続けていくために

長野県
みなみ あい き むら
南相木村

へ流れています。総面積は66・05km²で、その約9割を山林原野が占めており、川に沿って10の集落が点在している小さな山村です。南相木川に沿ってさまざまな観光スポットが点在しており、大規模な水力発電ダムとしては日本一標高の高い1,532mに位置する「南相木ダム」や、高さ60mの奇岩「立岩」が名前の由来でシナノユキマスの氷上釣りなどが楽しめる湖「立岩湖」、長野県の名勝「おみかの滝」を始めとした見ごたえのある大きな滝が村内に6つ点在しています。「立岩湖」では冬季、日本で数カ所しか見ることのできない「アイスバブル」を見ることが出来ます。アイスバブルは、1982年の台風が原因で発生するようになり、また、上流から流れてきた草や木等が腐り、湖底にガスが溜まることで発生する非常に珍しい幻想的な光景です。



フォーラム

また、隣村である北相木村との境に位置する日本200名山のひとつでもある「御座山」（おくらさん）、5月末から6月中旬にかけて2万株を超えるレンゲツツジが一斉に咲き誇る「立原高原」等雄大な自然に囲まれた魅力的な景勝地がそろっています。村の基幹産業は豊かな自然環境が生み出す標高1,000mで生産する高原野菜をはじめとする農業や、カラマツを中心とする林業であります。地域資源を活用する取組は、過疎や人口減少が進行する当村においては地域振興の一助となっています。住民基本台帳による各年の人口推移を見ると、平成22年からの10年間ですべての年代の人口がおおむね減少傾向にあります。産業人口の高齢化や後継者不足の課題を解決するためには、地域資源を活用した産業の



▲立岩湖で見られるアイスバブル

確立と、それに伴う雇用を促進し若年層の移住定住を進めることが大きな柱のひとつとなります。

2. 林業への取組の背景

山林原野が村の総面積の9割を占める当村では、戦後に植林されたカラマツが伐期を迎え、更新伐が盛んに行われています。持続可能な循環型林業を確立させるためには、専門家や（有）南相木村故郷ふれあい公社事業部をはじめとする民間企業・団体と連携し、地域おこし協力隊制度を活用するなどUIJターンによる林業従事者の獲得・育成が今後の大きな鍵となっています。小さな村ならではの持続可能な産業及び雇用を創出するために、森林資源の効果的な活用に取り組んでい

くことが今後の大きな課題と考えています。

3. 事業内容

以前まで植林されるカラマツ苗は村外で生産されたものでしたが、現在は村内で育苗された苗が一部使用されています。村内のカラマツから種を採取し、村内で育苗し、植樹するという域内循環型の林業をめざすとともに、カラマツ苗の育苗が村の新たな産業となると期待されています。

当村の育苗事業は、地域おこし協力隊として村に来られた方が、任期終了後それまで村で進めていたカラマツ育苗事業を引き継ぎ、令和6年度には法人化しさらなる規模拡大をめざしています。今では当村の林業分野において必要不可欠な人材となっています。

令和5年のカラマツ種子採取数は約10万粒で、そのうち発芽に至ったものは約2万数千株でした。発芽率は20％と非常に低く、年によりバラツキがあり発芽率を上げるためにどうしたらよいか日々研究を続けています。その取組の一つが情報収集です。カラマツの播種は冬から春にかけて行い、ハウス内では室温・湿度・水温等を記録し今後につなげていくためのデータ収集を行っています。

苗はおおよそ2年で15cmまで成長し、



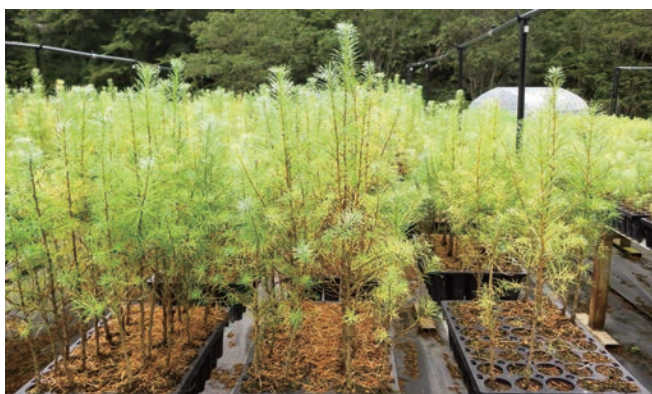
▲村内で大きく育つカラマツ



▲カラマツ育苗ハウス

夏を迎えた苗は屋外で育てます。この間も気候に合わせて水管理や霜よけ等を行い、出荷できるまでには3年程度かかります。この工程を経て無事に令和6年度出荷された苗は約2万本です。

当村で生産された種苗は、長野県佐久地域振興局が企画する佐久地区森林祭においても使用されました。出荷された苗の成長度合いや定着率について、利用された方には非常に好評をいただいております。当村で起業したカラマツ生産事業者は、令和6年度に長野県山林種苗協同組合の準組合員になることができました。今後の事業展開として年間5万本生産ができるように



▲カラマツ苗3年目

村内における林業分野を活性化させ、今ある資源を無駄にせず有効活用するべく、支障木伐採の際に出た、ナラ・カラマツ・クリ・ケヤキ等の木で薪づくりをしています。この薪は、役場庁舎内をはじめ公共施設等の薪ストーブで使用しています。この取組は近年価格高騰している光熱費を低く抑

4. 林業分野の新たな取組として

事業拡大をしていきます。

本事業は、かん水施設の設置やハウス設置費など森林環境贈与税を活用しています。今後も当村の地域特性にあった方法で持続可能な産業及び雇用を創出し、森林資源の効果的な活用を続けられるよう努めてまいります。



▲佐久地区森林祭の様子

えることができ、生産された薪はふるさと納税返礼品として寄附をいただいた多くの皆さまに喜んでいただいています。

平成30年度に和田地区に建設した村営住宅は、村内のカラマツをふんだんに使用した木造二階建てで、一戸あたり89・42㎡、木の温もりが肌で感じられる住宅です。かつては、カラマツの未成熟材を使用し反りやねじれが多く、カラマツは使いづらいという印象ができ上がっていました。しかし、近年では乾燥や製材技術の向上により、狂いの少ないカラマツ材が建築材として利用できるようになりました。強度と耐久性を備え、カラマツ特有の赤みを帯びた木目は見る者を魅了し、今後のさらなる利用拡大が期待される



▲カラマツ材を利用して建築された村営住宅

ところです。当村でもカラマツの伐採から製材・利用と、循環型林業のシンボリック建物になるよう、村営住宅に利用していきます。

カラマツの建築材としての利用について、もう少し触れたいと思います。カラマツは芯部が直接的なねじれの最大の原因となるため、製材する際に芯部を除外した木取りを行うことでねじれを防ぎます。乾燥は中温セット人口乾燥により内部割れを抑え、柱・梁桁・土台といった建築構造材として安心して使用できるようになりました。芯取り構造材は芯持ち材に比べて構造強度が1・5倍になるという試験結果もあります。また、今までは木取り後余った部分は、木製チップ利用、または破棄されていましたが、今回の住宅建設では木取りの工夫により限りある資源を有効に活用しています。その他の構造材、間柱、野縁、銅縁、はがら材や仕上げに使用する造作材、床材、天井材等にもカラマツを使用することで、村産の木材使用率が100%可能となります。内部仕上げは建具を除く、すべての木部にカラマツを使用しています。また、構造材、外壁材、造作材もすべて南相木村産カラマツです。目で見て触れる所に南相木村産カラマツを使用することで木への愛着がわき、自然とともにある南相木の暮らしを感じることができます。CO₂排出抑制が世界的な課題となっていますが、日

フォーラム



▲立原高原キャンプ場



▲標高1,000mで育つ高原野菜

本の産業界全体における建築部門の排出比率はおよそ45%を占めています。村内や県内のカラマツを使用することは、住宅建設におけるCO₂排出削減に非常に有効となります。見渡す限り山林、それらすべてが村の財産であり、これからの循環型林業を進めていくための大切な資源です。この宝を私たちは守り続け、後世に大切に受け継いでいきます。

5. 立原高原が誇る2万株のレンゲツツジと満点の星空

天狗山（てんぐやま）の麓に広がる標高1,300mを超える『立原高原』。毎年5月末～6月にかけて2万株を超えるレンゲツツジが一斉に咲き誇り、レンゲツツジ、白樺、新緑のコントラストが訪れる多くの人々の目を楽しませてくれます。そして、色鮮やかに咲き、一面赤褐色に染まるレンゲツツジが南相木村に夏の訪れを知らせてくれます。レンゲツツジの開花とともに楽しむことができるのが立原高原キャンプ場です。キャンプ場には大小19棟の貸コテージやオートキャンプサイト、林間キャンプサイト、テントサウナ、サニタリーハウスが整備されています。静まり返った夜、都会では見られない満点の星空をゆっくりと眺めることができるフリースペースキャンプ場は大人気です。夏にはバーベキューや魚釣りを楽しむ多くの家族連れで賑



▲滝見の湯

わっています。南相木村の観光名所のほとんどが、古くからその地で、守り続け、その魅力が活かされています。

6. さまざまな表情を魅せる南相木の滝

急峻な地形に囲まれた相木深谷には、さまざまな表情を見せてくれる多くの滝が点在しています。村には2つの流域があり、南相木川には千ヶ滝・犬ころの滝・立石の滝・おみかの滝、もう一方の栗生川には不動の滝・千が淵の滝があります。夏は滝巡りをしながらたっぷりマイナスイオンを浴び、冬は一面が凍り迫力のある美しい滝を楽しむことができます。中でも『おみかの滝』は長野県の名勝地に指定されている村を代表する観光名所です。滝



▲滝見の湯から眺められる犬ころの滝

は上淵、中淵、下淵と呼ばれる壱状をした3つの滝壺があり、高さ15m、深さ7m、幅14mの勇壮な滝です。遊歩道として岩盤を掘ったトンネルから滝を見ることができ、四季折々の景色を楽しむことができます。また、日帰り温泉施設の『滝見の湯』からは犬ころの滝を眺めることができます。これからも、かけがえのない自然を大切に守り続け、自然から得られる多くの恵みを受けながら、訪れる皆さんが楽しめ、生活する人も皆が笑顔であふれる村をめざしてまいります。ぜひ、一度南相木村へお越しください。皆さまにお会いできるのを楽しみにしています。

町村

ご当地キャラじまん

Vol.170

特産品だけじゃない!

文化・歴史を身にまとして観光大使!!

ご当地自慢のおいしいものや伝統行事を身にまとい、
体を張ってPRしているご当地キャラたちを紹介するコーナーです。
今回は、西ブロック(中国・四国・九州・沖縄)からピックアップ。

西ブロック

3月20日生まれ。永遠の10歳。頭が重いこともあって、おっとりした性格。走ることは苦手。観光案内が趣味で、太鼓と笛とカネに合わせて上手に舞うのが得意。頭のとんがりに触れると幸運が訪れる。



みやこ町マスケットキャラクター

みやっこ君

福岡県みやこ町

2011年、みやこ町をPRするためのマスケットキャラクターを公募しました。応募総数210点の中から、厳正な審査のうえ誕生したのが「みやっこ君」です。みやこ町に古くから伝承されている神楽の衣装を身にまとい、頭には福岡県の有形文化財に指定されている「国分寺」の三重塔をモチーフにした帽子をかぶっています。誰からも親しんでもらえるようにとかわいらしい見た目にしておかげで、老若男女から大人気です。町の情報を発信する際に、「おはみやっこ」と挨拶するうちに、語尾に「みやっこ」とつける話し言葉で、SNSなどを通して町の情報を発信している「みやっこ君」。これからも町内外のイベントに参加しながら、みやこ町のPR活動を続けていきます。

沖縄県渡名喜村

球磨村マスケットキャラクター

球磨太郎

熊本県球磨村



8月18日生まれの子。永遠の12歳。のんびり屋さんだが、こつこつと物事をやり遂げる主義。きれいな山や川がとっても大好き。趣味はお米づくりとお花づくり。好きな言葉は「三ツバネがいないと(三つ葉がないと)」。あ。

球磨村のイベントの盛り上げや村おこしにつなげるためにマスケットキャラクターを作成することとなり、「棚田と癒しの里くまむら」をテーマに役場職員有志がデザインを担当しました。「つなぐ棚田遺産」に選定された村内の「棚田」がモチーフで、帽子と長靴でその棚田を表現しています。名前は、村民に募集をかけ、216点の応募作品の中から決定し、2010年10月に開催された「ふれあいまつりくまむら」でお披露目されました。普段はお米づくりやお花づくりなどの農作業をしていて、棚田のパトロールが日課という「球磨太郎」。時々、球磨村のイベントに参加したり、村内の観光施設に出没したりしています。これからも、球磨村のマスケットキャラクターとして、村の認知度アップや観光振興のため活動していきます。

渡名喜島公式キャラクター

ふくぎのフーちゃん

沖縄県渡名喜村



樹齢300年の「フクギ」から突如現れた「フクギ」の妖精。「もちきび」「島にんじん」「カツオ」「アーサー」が好物であること以外、謎につつまれている。船の汽笛を聞くと、そわそわして港に出てきてしまうらしい。

公式キャラクター作成にあたり、2015年5月に名称を公募したところ、150点ほどの応募があり、関係者による投票を経て、「ふくぎのフーちゃん」が誕生しました。モチーフは、村の木「フクギ」です。同年8月13日に開催された「第23回となきまつり」で名称が発表されました。名称は決まったものの、大きな葉っぱの形をしているので、こどもたちから「葉っぱさん」と呼ばれてしまうこともあるのだとか。それでも、見た目のかわいさから、観光協会ではタオルやアクリルキーホルダー等のグッズ、LINEスタンプも販売されていて、人気者です。「フクギ」は、主に重要伝統的建造物群保存地区の各住宅の周囲に防風林として植樹されていて、村にとっても大切な木。そんな木がモチーフの「ふくぎのフーちゃん」は、村民みんなの安心安全な生活を見守ってくれます。

今回は、東ブロック(北海道・東北・関東)からご紹介します

情 報

地方公共団体金融機構

令和7年度 地方公共団体の経営・財務
マネジメント強化事業の派遣申請を受付中！

地方公共団体が直面する課題の解決を図るために、総務省と地方公共団体金融機構の共同でアドバイザーを派遣する事業を実施しています。 **無料（予算措置不要）** ですので、いつでもお気軽にご活用いただけます。

活用団体の声

ご活用いただいた団体からは、「予算措置なしでアドバイスを受けられることはありがたい」「標準化 PMO への入力を予定より早いスケジュールで進めることができ、時間に制約がある標準化に向けた作業が大幅に進み助かった」といった声をいただいています。
それぞれのニーズに応じて、ぜひご活用ください。

お知らせ

令和7年度は支援分野に「地方公共団体間の広域連携に関すること」及び「地方税務行政の DX 等に関すること」を追加しました。第4次募集（10月～）からは「全国の好事例を生かした地方創生 2.0 の取組（仮称）」の追加を予定しています。

1 事業概要

地方公共団体等の要請や状況に応じて、公認会計士、学識経験者等約800人の専門的アドバイザーがみなさまをサポートします。

(1) 支援分野 ※⑨は啓発・研修事業のみで実施

アドバイザーを派遣する支援分野

- ① 公営企業・第三セクター等の経営改革
・ DX・GX の取組 ・経営戦略の改定・経営改善
・ 公立病院経営強化プランの改定・経営強化の取組 等
- ② 公営企業会計の適用
- ③ 地方公会計の整備・活用
- ④ 公共施設等総合管理計画の見直し・実行（公共施設マネジメント）
- ⑤ 地方公共団体の DX
・ 情報システムの標準化 ・ 共通化・DX の機運醸成
・ 外部デジタル人材の確保 ・ 消防防災 DX 等
- ⑥ 地方公共団体の GX
・ 地域共生・地域裨益型再エネの立地
・ 脱炭素型まちづくり 等
- ⑦ 地方公共団体間の広域連携（追加）
・ 公共施設の集約化等 ・ 専門人材の確保
・ 事務の共同実施
- ⑧ 地方税務行政の DX 等（追加）
・ 課税事務の効率化 ・ 徴収事務の効率化
- ⑨ 全国の好事例を生かした地方創生 2.0 の取組（仮称）（第4次募集より追加予定）
- ⑩ 首長・管理者向けトップセミナー

(2) 支援の方法

地方公共団体・公営企業に対して派遣

- 1 課題対応
アドバイス
事業 地方公共団体・公営企業が直面する課題に対して、当該課題の克服等、財政運営・経営の改善に向けたアドバイスを必要とする場合に団体の要請に応じて派遣
- 2 課題達成
支援事業 政策テーマの実施に当たり、知識・ノウハウが不足するために達成が困難な地方公共団体・公営企業に、技術的・専門的な支援を行うために派遣

都道府県に対して派遣

- 3 啓発・
研修事業 都道府県が市区町村・公営企業等の啓発のため、支援分野の研修を行う場合に派遣

2 申請期間（2月末～12月末）

- 令和7年度も切れ目なく申請を受け付けます。
※派遣日程等は、申請受付後でも変更可能です（活用が見込まれる場合には、計画ベースで申請を行っていただいて差し支えありません。）

3 実績

- 全国の地方公共団体の約 60% が活用
- 令和6年度のアドバイザー派遣は約 3,500 回

- 機構 Web サイトにおいて、「実施の手引き」など、関係資料を掲載中！
- 活用事例も紹介しています。
ぜひご確認ください。



※申請に際しては、本事業の Web システムをご利用いただけます。
システムの使い方等については、下記 Web サイトで公表しているマニュアルを参考にしてください。

▼ 地方公共団体の経営・財務マネジメント強化事業

経営・財務マネジメント強化事業 検索

<https://www.jfm.go.jp/support/development/keieizaimu.html>



お問い合わせ先

☎ 地方支援部 支援企画課：03-3539-2676 ✉ chihoushien@jfm.go.jp



金融で地方財政を支え 地域の未来を拓く

地方公共団体金融機構
Japan Finance Organization for Municipalities

町村 かわら版

塩谷町、保健福祉マース導入 AI搭載の車両で巡回 遠隔医療も見据え 過疎地域のモデルケース目指す

(栃木県塩谷町)

栃木県塩谷町は本年度から、総務省の過疎地域支援事業交付金2千万円を活用し、遠隔通信機器を搭載した車両で巡回診断を行う「保健福祉Maas(マース)」を始める。来年度からはオンライン診療機能を追加した車両にアップデートさせ、「医療マース」にも県内で初めて着手する。近年逼迫(ひっばく)する医療体制の解決に向け、池田浩之(いけだひろゆき)副町長は「10年後の町内医療を考え、今のうちに手を打たない」と危機感を示している。

マースは交通サービスにオンライン機能やAI技術などを搭載した車両。保健福祉マースではトヨタ「ハイエース」を改造し、内部に血圧計や酸素飽和度計測機などを載せる。定期的に町内公共施設を巡回し、フレイル(加齢による心身の衰え)診断などを行えるようにする。

医療マースはさらに遠隔聴診器や簡易の超音波器を搭載し、町内外の医師が遠隔で診察や問診。1次医療は診察したデータを町内のドラッグストアや薬局へ送り、処方箋を宅急便で郵送する。2次医療の場合は医師が紹介状を書くなど、新たな医療体制

を構築する。また災害時にも活用し、避難所に診療所同様の機能を備えたい考えた。26日の「えかんべ祭」で、モデル車を展示する。役場の保健師とオンラインでつなぎ、簡単な健康診断が体験できる。

2023年1月に町内の65歳以上を対象に実施したアンケートでは、在宅医療を望む声が4割と少なくなかった。昨年11月には町と町内診療所の医師でつくる地域医療懇談会が発足。意見交換を踏まえ、町はオンライン診療の検討を始めた。

町によると、現在町内の診療所は4力所あり、常勤医師は計3人、非常勤が計6人のみ。入院病床がなく、産科、婦人科、小児科もない。移住定住を進めるため、町は住み続けられる環境づくりに注力する方針。池田副町長は「医療機関を確保しなければ移住定住の選択肢にもならない。医療マースを成功させ、過疎地域のモデルケースになれば」と話していた。

(下野新聞・2025年7月6日)

空から音声 ドローンで避難指示
大町町中島地区で災害対応訓練 佐賀

(佐賀県大町町)

2019年と21年の記録的豪雨で深刻な浸水被害に見舞われた佐賀県大町町の中島地区で6日、ドローンを活用した初の災害対応訓練があった。放送が聞こえない地域に空から音声で避難を指示、ドローンから送られる映像で安否や救助要請を確認した。

町の防災行政無線は聞こえるが、地区内連絡の放送は聞こえない地域があり、町を拠点に活動する防災事業者「パブリックゲート」(公門寛稀代表)や熊本県のドローン専門企業と連携して情報伝達の訓練をした。

住民や消防団員ら約130人が参加。スピーカーとカメラを備えた2機のドローンが中島公民館を飛び立ち、あらかじめ設定されたルートを飛んで地震発生と避難指示の発令を音声で伝えた。

事前把握している避難に支援が必要な約20戸には消防団員が家に向かい安否を確認。救助支援が必要な場合はドローンに旗を振って知らせた。避難指示を聞いた住民が集まった公民館では、ドローンから届く映像がテレビ画面で流れた。

訓練は順調に進んだが課題も見えた。ドローンからの音声が多分に届かない場合もあり、スピーカーやカメラの向きを変更できる機種がより有効なことが確認できた。電波が届かない場所もあり、データ通信ができるSIMカード利用の検討も課題になった。支援が必要な場合の旗使用のルール化が必要なども分かった。

中島地区は現在、約2500戸で7000人が居住している。2回の豪雨では1200戸近くが床上浸水し、ボートで救助された人もいた。冠水に関係なく動けるドローンによる情報把握に期待がかかる。

鶴池弘文区長は「ドローンがどんな形で運用されるのが理解でき、地域の危険箇所もあらためて確認した。今後訓練を重ね、災害に対する意識を高めていきたい」と手応えを話した。(小野靖久)

(佐賀新聞・2025年7月8日)

行政、DXで業務効率化
今帰仁、タスクフォース新設 沖縄

(沖縄県今帰仁村)

沖縄県今帰仁村は、行政のデジタル化を推進しようと「DX(デジタルトランスフォーメーション)タスクフォース」を新設した。業務の効率化や住民サービス改善

などを目的に、各課から選抜された12人の職員が課題の把握や仕組みづくりなどに取り組む。久田浩也村長は4日、委嘱状を職員らに交付した。

村では分野横断的かつ戦略的にDXを推進していくために6月19日、比嘉英雄副村長を最高デジタル責任者(CDO)としてDX推進本部を立ち上げた。今回、全庁的に取り組むことを目的に、推進本部の下にタスクフォースを設置した。庁内のDXに対する意識向上や課題発掘、業務改革とサービス向上の推進、新技術の試行・活用による課題解決、持続可能な改善提案の実施などが役割。

活動内容としては、研修やワークショップを通じたDXスキルの習得、現場課題への対応と施策提言、技術活用と情報発信を予定している。

担当者によると、現在、職員らは人手不足で業務負担が多く疲弊しているという。「デジタル技術を活用した業務改善で、村民の利便性の向上だけでなく、村民のためになる創造的な企画が発案できる余裕を持つことが可能になるのではないか」と期待した。

久田村長は「村のデジタル化推進により、行政サービスの選択肢を増やし、誰一人として取り残さない村になってほしい」と話した。(玉寄光太)

(琉球新報・2025年7月9日)

47 行政

本コーナーの記事は施策立案にも役立つ47行政ジャーナルの許諾を受けて掲載しています

<https://47gyosei.jp/>



サマージャンボ

7 億円

1等・前後賞合わせて7億円

1等5億円、前後賞各1億円

当さんの
チャンス広がる！

サマージャンボ ミニ

5,000万 円

1等・前後賞合わせて5,000万円

1等3,000万円、前後賞各1,000万円



この宝くじの収益金は、

市町村の明るく住みよいまちづくりに使われます。

7月11日金 同時発売

●発売期間：7月11日（金）～8月11日（月）

●抽せん日：8月21日（木）

各1枚
300円

PCやスマホで
ネット購入！



宝くじ公式サイト 
<https://www.takarakuji-official.jp/>

2025年市町村振興宝くじ

一般財団法人 全国市町村振興協会

随 想

興部町は北海道のオホーツク海沿岸の町で和人定住から137年が経ちます。アイヌ語の「オウコッペ」を由来として、オ(川尻)、ウコッ

(合流する)、ペ(もの)という意味を持ち、現在も2級河川など5本が流れ集落を形成しています。町の面積は362・55km²、人口約3、500人と極めて小規模な自治体です。私はこの町で生まれ、農家の4代目として育ち酪農業を25年間営んできました。本町は河川が多いため当時の耕作地は約2、500ha程度で、

業革命」とも言える取組を三度にわたり実現してきましたのでお伝えしたいと思います。

まず、本町が酪農専用地帯となるには乳牛飼育に必要な農地の不足が大きな問題でした。本町は海拔5mと低く泥炭地や笹原が多く、さらには5本の河川に沿って手の指のように低い丘陵のような山が内陸から海に向かって続いていました。先達

興部酪農の第一次革命です。

牧草地が整備され、次第に飼育頭数は増え生産量は拡大しましたが、当時生乳の集荷方法は輸送缶(20L)でした。これでは生産量の増加に対応しきれないことから、1971年には当時の農協組合長が電気店と考案開発した水冷式のバルククーラーを導入し、ミルクローリー車による集荷を全道に先駆けて始めました。当然このためには農道や電力供給の整備等も併せて取り組まなければならなかった『生乳の衛生



興部酪農の小さな産業革命

北海道興部町長 石川 一寿

古くは畑作農業と沿岸漁業、そして林業が主体の町でありました。1953年から4年間打ち続いた大冷害・大凶作を契機に寒冷地農業の確立が強く求められ、1955年酪農振興法に基づく「高度集約酪農地域」指定を受けて、町と農協・農民

となる団体営事業により33年後の1988年には2・64倍の約6、600haの農地を確保することが出来たのです。特に笹原ではプラオでの畑起こしが難しく、新たにブルドー

的な生産と物流の整備』という今では当たり前とも言えますが、当時としては革新的取組が第二次革命です。

が一体となり酪農へと一大転換をめざしたのです。歴代町長や組合長のご苦労は並々ならぬものであったと思うのですが、このことが70年を経た今日の興部酪農を築く始まりでありました。本町の取組は酪農業の「産

少ない土地なのでディスクプラウを使った耕法を初めて導入するなど、町・農協が実験ほ場で独自の試験を繰り返し本町に適したほ場造成方法を編み出し、農協が実施団体として造成事業を展開したのでした。『農地の拡大を自らの手で行う』これが

飼養頭数が増えるにつれ放牧主体からサイレージ主体へと飼料給与形態が変化していきます。これまで経営は個人というのが酪農の主流でしたが、時代と共に共同経営あるいは共同作業等が繰り返し導入され、牧草やコーン等の飼料収穫作業も共同作業から業者委託等へと変化していきますが、これがコントラクターと

言われる形態で、建設業者等が参入し現在全道で展開されています。しかし、興部町ではサイレージを共同で収穫、貯蔵するセンターを作り、さらには一定の栄養価の飼料となるよう配合して加入農家に届ける、いわゆる乳牛の給食センターのような組織を、1998年5戸の農家が立ち上げました。これが現在全国の酪農地帯に普及しているTMRセンター(混合飼料を調整・配送・給餌する施設)の原型となりました。現在、町内では5つのTMRセンターが組織され、生産乳量64、000t、一戸平均1億3千万円の粗収入を上げられる酪農に成長してきました。TMRセンターの普及は単なる飼料調整だけではなく、雇用や経営の在り方など『企業としての酪農に成長させる』大きなきっかけになっているのです。これが第三次革命と私は考えます。

条件不利地の本町で冷害を克服するため導入した酪農は、農業の中でも毎日収入が得られる産業です。そして、働き手にも関連産業にも毎日仕事が生まれる、裾野が広く力強い、まさに基幹産業へと成長したのです。先達の思いが世代を超えて受け継がれ、今日の興部酪農に育てて下さいました。私はこれを「興部酪農の小さな産業革命」と呼び、町の誇りとしてこれからも町づくりにつなげてまいります。